

総特集「グローバル・スタディーズ」を読んで

福田州平

はじめに

本総特集は、「グローバル・スタディーズという新たな潮流のなかで、『グローバル・イシュー』を扱う地域研究者の最前線を紹介する」とともに、そこから生まれる地域概念の再編、方法的課題についても議論」（九頁）するものである。本総特集は、「日本におけるグローバル・スタディーズの受容と地域研究」と題する座談会、そして第一部「グローバル・イシューと地域研究」、第二部「東南アジアをめぐるグローバル・イシューと地域研究」の三つの部分から構成されている。

評者に課せられた課題は、大阪大学グローバルコラボレーションセンター（以下GLOCOL）の活動や経験を

踏まえて、本総特集に対してコメントすることである。GLOCOLは、大阪大学の国際化を担うために設立された部局である。二〇〇七年の発足以来、人間の安全保障やグローバル共生などの地球規模の課題、すなわちグローバル・イシューに対し、研究だけではなく、教育および実践的活動を行ってきた。評者がかかわった活動の経験に基づいて、本稿ではこの総特集に対して三つの点からコメントを行いたい。

なお、言うまでもないことだが、本稿は評者の個人的見解であり、所属する組織を代表するものではないことを念のため付記しておく。

I 転換期にある知と大学

グローバル・スタディーズという新たな知の領域が要請され、大学もそれに応える形で、さまざまな研究プロジェクトを立ち上げた。また、いくつかの大学で、「グローバル・スタディーズ」を冠する研究科、学部、学科が設置された。しかしながら、座談会のなかで指摘されているように、地域研究とは関係なく、英語力の強化や英語で授業をすることを「グローバル・スタディーズ」と称している場合が、しばしば見られる。また、「グローバル・スタディーズ」を冠した研究科などの「中身のワインがほんとうに変わっているのか」（四五頁）といった懸念は、どうしてもついて回ってくる。こうしたグローバル・スタディーズをめぐる事態の背景として、現在、知と大学が転換期にあることを指摘しうる。言い換えれば、「グローバル・スタディーズ」は転換期の落とし子の一人である。

一九世紀ドイツのフンボルトの改革以来、〈教育+研究〉が、近代から現在に至るまで、各国によりその濃淡はあるかもしれないが、大学の在り方を規定してきた。これを、とりあえずフンボルト・モデルと呼ぼう。フンボルト

ト・モデルは、近代以来、政財界の要請を受けて、うまく対応してきたすぐれた大学モデルだったと言える。しかしながら、現在の大学の議論における百家争鳴の状況は、フンボルト・モデルの史的終焉が近づいていることを示しているのかもしれない。おそらく、我々は、〈フンボルト・モデル+ a 〉を模索している最中なのであろう。

〈フンボルト・モデル+ a 〉は、近代国家に回収されない人々のつながりを生む公共圏への寄与にかかっている。すでに、さまざまな学問分野で、近代国家に回収されない発想の転換が行われている。たとえば、安全保障論では、安全保障政策が近代国家に回収される傾向が強かったのに対し、人々の日常空間の安全に目を向けた人間の安全保障が提唱されて、はや二〇年がたつ。人間の安全保障は、近代国家に限定されていた安全認識から、新たな認識を切り開くことに貢献してきた。いまこそ、大学それ自体が、近代国家でなく、これからの公共圏創設に寄与する新たな立脚点に立たねばならない。グローバル・スタディーズを考えるときも、その知のプロジェクトが近代国家の認識空間を開き、新たな公共圏を作ることに寄与する+ a に貢献できるかが問われてくるであろう。

II 教育・実践・実践の三輪車

GLOBALの活動を通じて痛感することは、「グローバル」と海外に出てなにかすることに考えると考える人がいますが、これはまったくの誤り」であり、「海外に出ていって、英語でペラペラ喋るとい話ではない」（四九頁）という指摘である。地に足のついた知の営みが、昨今言われる「グローバル人材」の育成に求められると、評者は考えている。

GLOBALでは、〈教育+研究〉に「実践」を加えて、これまで活動を行ってきた。実践の舞台、すなわち新たな公共圏へ寄与する足掛かりを、「頭上」ではなく、「足もと」に求めることが多かった。GLOBALの活動の一例を、ここで紹介したい。

現在、さまざまな地方公共団体で、ニューカマーの外国人移住者が増えてきている。そして、外国にルーツをもつ子どもたちが、十分な学習サポートを受けられない状況に置かれている。GLOBALでは、吹田市国際交流協会とともに、こうした子どもたちへのサポート事業「ハロハロSQUARE」を二〇一一年に立ち上げた（ハロハロとは、フィリピン語で「ごちやませ」の意）。その試みは、小

さなものかもしれないが、学習サポートだけでなく、子どもたちの「居場所」を提供することに寄与している。ハロハロSQUAREでは、学生ボランティアが主となって子どもたちへの学習支援を行い、吹田市国際交流協会のスタッフが運営し、グローバルコラボレーションセンターの担当教員が、適宜、運営に協力している。また、この事業を、教育に結びつける試みもなされている。これまで行われてきたグローバル共生に関する研究および教育に、実践活動が結びつく形となっている。

こうした活動を通じて、大学の新たなキーワードとして、評者は「実践」というチームの重要さを再認識した。すなわち、〈フンボルト・モデル+実践〉である。これは、新たな公共圏の創設に向けた大学のありかたとして、十分にありうる形なのではなからうか。そして、ともすれば「頭上」に目が行きがちなグローバル・スタディーズにおいても、「足もと」での実践的活動は重要である。もともと、教育・研究・実践の三輪車は、車輪がどれか一つ欠けても運転していくことができない。これをうまく運転していく工夫ないしは仕組みが、グローバル・スタディーズに求められているのではなからうか。

III 現地での学び——海外フィールドスタディ

本総特集の諸論文は、いずれも現地でのフィールドワークに裏打ちされたものである。現地でのフィールドワークにおいては、幡谷論文が指摘するように、「所与の解釈で限定された主流概念から離れ、個々のローカルな文脈、地域社会の文化、歴史、価値のもとで当該概念を再構築することが肝要」（九七頁）であるが、これは、研究のみならず、海外体験型の教育においても同様であると、評者は考えている。

GLOBALでは、海外での実地体験型学習と実践をサポートすることを目的とする「海外体験型企画オフィス（FIELD）」を二〇一〇年八月に設置し、海外インターンシップ、海外フィールドスタディなどを、学内のさまざまな部局と協力しながら、企画・実施している。グローバル・スタディーズの教育面を考える上で、海外体験型の教育プログラムは重要な位置を占めると思われる。そこで、GLOBALが二〇一三年八月にモンゴルで実施した海外フィールドスタディを、海外体験型教育の一例としてここで紹介したい。

本海外フィールドスタディでは、参加した学生たちが遊

牧生活の持続性（環境問題）、開発、そして都市空間に関して調査・考察し、その成果をまとめた。その報告書は、日本語で執筆されたが、モンゴル語にも翻訳し、現地への還元を果たしている。この一日間のスタディツアーのなかで、学生たちは、しばしば自分の先入観が壊されていく体験をしたようである。モンゴルを発展途上国だとイメージしていたある学生は、近代的なビルが林立するウランバートルの光景を見て、「こんなに開発が進んでいるとは思わなかった」と感想を述べたことがあった。また、ウランバートルから西に約四〇〇キロ離れた調査地に車で向かう途中、舗装道路から草原へと道が変わったが、そのとき、「舗装道路に戻れるのか？」と不安を抱くような言葉を発した学生もいた。加えて、学生が先進国/発展途上国といった二分法を安易に持ち出すこともあった。これらは、各個人がもつ先入観の問題である。先入観は、本来多様である地域を他の地域とのつながりから切り分け、それぞれを均一の存在として捉えてしまいかねない（大阪大学GLOBAL FIELD 二〇一四）。

現地で学ぶ効用は、こうした先入観を一度崩して、ローカルな文脈に沿った新たな考え方で対象にアプローチしていく必要性を自然と悟り、行動に移せる点にある。本海外フィールドワークでは、さまざまな人との出会いと驚きを重ね、思考をせき止める大きな壁を少しずつ崩していっ

た。グローバル・スタディーズにおいても、海外体験型教育は重要だと思われるが、その教育のデザインにおいて、地域研究者の役割は非常に大きい。モンゴルでの海外フィールドスタディも、同地域を調査地とする地域研究者を抜きに成り立つものではなかった。

おわりに

以上、GLOCOLでの評者の経験をもとに、知と大学が転換期にあること、教育・研究・実践の三輪車、そして現地での学びの三点から、総特集「グローバル・スタディーズ」に対して簡単にコメントを記した。以上の三点から考えるに、グローバル・スタディーズは、中西論文が指摘する、「どのようなケースにも一つの枠組みですべて対応できるという神話」(一一八頁)が、実際に神話にすぎないと、教育、研究、実践のそれぞれの場で明らかにすることを期待されているのかもしれない。日本のグローバル・スタディーズは、フィールドを重視する地域研究者が主要な役割を果たしているからこそ、この期待に応えることができるかと確信している。

●参考文献

大阪大学 GLOCOL FIELD (二〇一四) 『二〇一三年度 海外フィールドスタディプログラム モンゴル』開発と保護—環境保護遊牧民組合を作る「報告書」大阪大学 GLOCOL。

●著者紹介

- ① 氏名……福田州平(ふくだ・しゅうへい)。
- ② 所属・職名……大阪大学グローバルコラボレーションセンター・特任研究員。
- ③ 生年・出身地……一九七四年、群馬県。
- ④ 専門分野・地域……国際関係論。
- ⑤ 学歴……東海大学文学部北欧文学科、東京国際大学大学院国際関係学研究科、中部大学大学院国際関係学研究科。
- ⑥ 職歴……中部大学人間安全保障研究センター(研究員、二年二ヶ月)、中部大学国際交流センター(嘱託事務員、半年)。
- ⑦ 現地滞在経験……東アジアや北米を中心に、一、二週間程度の短期滞在を繰り返している。
- ⑧ 研究方法……主に文献調査、史料調査。
- ⑨ 所属学会……日本国際政治学会、日本平和学会、国際文化学会、人間の安全保障学会。
- ⑩ 研究上の画期……東日本大震災。明治以来の日本の近代化の終焉を感じ、「なぜ日本は近代化をしまったのか」という問いを抱くようになり、近代化の促進装置の一つだった博覧会に着目するようになった。
- ⑪ 推薦図書……武者小路公秀『人間安全保障論序説』(国際書院、二〇〇三年)。グローバル・イシューを考える上で、非常に示唆的な本である。